



著者近影

「放送」に拘り、「スーパーリージョナル」に身を置き続ける

私の放送人生

第14回
元毎日放送 (MBS)
山本 雅弘氏

学生時代から入社まで

京大法学部に一浪して入学したのが1960年(昭和35年)、いわゆる60年安保騒動の真っ只中だった。

大学構内は日米安全保障条約の破棄を主張するアジ看板やチラシに満ちていた。東京では反対デモが国会周辺を取り巻いていたが、6月15日デモ隊と警官隊の衝突のなかで東大生・樺 美智子さんが死亡した。16日に大学で抗議集会が開かれ、東京の抗議デモに参加することになった。大学の新聞部(京都大学新聞社)に入っていたので取材を兼ねてそこに加わったのだ。

6月17日午前0時、京都発夜行列車に乗り込んだが、この日が20歳の誕生日だった。国会前のデモは凄まじく、そのエネルギーの生み出す風に紙片が舞い上がっていた。

以来4年間、ひたすら新聞(週刊)の編集、発行、取材に没入、単位不足で留年の危機を何とかしのいで卒業までこぎつけた。

当然就職は新聞記者以外に考えられず、毎日新聞を受けたがものの見事に失敗。その頃、毎日

放送で社内の推薦があれば受験できることを知り、放送局にも報道はあると心が動いた。中学校の先生が異動後に教えた生徒のお父さんが総務部長で、その方をお願いして受験した。可否が通知される頃、保護者が呼び出され、どうやら組合活動を控えるようにという要請だったようで、保護者である義兄が激怒して席を立つてきた。当時は労働争議が激しく、組合幹部に大学の先輩が多かった。

そんなわけで就職内定解禁日の10月1日には某大手商社に入った。ところが11月に入って突然内定通知が来た。多分内定者に辞退が出てお鉢が回ってきたのだろうと思っていたが、入社後しばらくして、ある先輩から経緯を聞かされ無然とした。

大学の某政治学教授から「あいつは真正左翼ではなくエセ左翼だ」と評され、その一言が入社につながったという。その教授は大学新聞にとつて終始「天敵」的存在だったので、いささか複雑な思いだった。

この年の入社は一般職が7人。希望の職場を聞かれ当然のこと

ながら「報道以外になし」とした。ところが驚いたことに、一般職全て営業要員だと知らされた。

結局、1人は入社時から人事部に目をつけられ、6人がテレビ3人ラジオ3人に分けられた。テレビ3人のうち2人がスポーツ営業部に決まり、私はテレビ営業部(つまり番組セールス部)に配属となった。以来約30年、ただひたすらテレビ営業部にのみ所属し、ついに報道には無縁のまま終わった。

入社後4年間の本社勤務を経て1968年(昭和43年)東京支社テレビ営業部に転勤。1991年(平成3年)本社に戻るまで実に23年間、同じ部に所属していた。年齢にして27歳から50歳、部の最若手で赴任し、部長で転出した。

赴任当初から支社の営業は、番組やイベント企画について猛烈に貪欲で、この体質は支社を離れるまで変わらなかった。

1969年(昭和44年)、学生運動の象徴的拠点だった東大安田講堂が陥落、その様子を現場で眺めていて猛烈な脱力感に襲われたのを覚えている。これが「転機」の始まりだったと思う。

プライベート①

23年間東京支社にいたが、ついに東京都民にはならなかった。赴任時は埼玉県越谷市の転勤者用住宅(社宅とは言わなかった)に入居。3年間の入居制限を何とか勘弁してもらって5年後に千葉県鎌ヶ谷市に移り住み、そこで転勤までの18年間を過ごした。5階建て51棟1450戸の大団地で、入居時の世帯主の平均年齢は38歳。勤務地は都内が多く、いわゆる「千葉都民」だった。

団地はまだ建設途上だったが、後続期の計画変更に伴うトラブルが建設会社と住民間で発生した。同じ棟に住む年かきの女性が当事者で、彼女が自治会に訴えた。この問題の採否をめぐる大論争になり、そんな場で同じ棟の代表として発言したため引つ込みがつかなくなった。その後自治会長、管理組合の規約作成のリーダー、組合の初代理事長と全く未経験の役割を担うこととなってしまった。規約で「理事の任期は2年、再任を妨げず」としたが若手中心の理事はほとんど留任を重ね、約50年を経た現在も続けている理事がいる。毎年、団地のそばの

料理屋で開かれる忘年会には、帰阪後も女房ともども出席していた。

管理組合設立当初の理事会メンバーは、1級建築士2人、厚生省(当時)の植栽担当、水まわり工事の専門家、民放の労組幹部、有名女学校教諭等と多士済々。意見をまとめるのに苦労したが、その後、共同住宅の住民管理のあり方、大型修繕工事の手法等々で周辺地区のモデルケースと見られるようになった。

今思い返すと、当時は会社の仕事もかなりハードだったので、我ながらよくやれたと思うと共に、この経験がその後の公私ともに役立つことになったと実感している。

プライベート②

ゴルフを始めたのは30歳直前、外勤に出る頃だった。野球少年だったので、若者の間で急激に流行りだしたゴルフは「亡国の遊び」と近寄らなかつたが、同期のラジオ外勤から勧められて初めてクラブを握った。ウィークデーに会社をサボって彼と2人で2ラウンドプレ

ーし、78ー78ー76ー66だった。「たかがゴルフ」と思っていたのでこの結果は大変ショックだった。以降練習に没頭、1日に500球打つたこともあった。練習で我が家に合宿した部員の歯ブラシが何本かあった。その甲斐あって本社転勤の頃には、大利根カントリーでオフィシャルハンデ11。最後に出た某スポンサーの会では37ー43で優勝、その賞品のパターは今も我が家のリビングに飾つてある。

東京支社勤務の23年間はテレビが急激に成長した黄金期でもあった。若いメディアには若い力が必要だし、その活躍の場は広がった。こうした状況で大阪局が東京支社で営業する場合、同じタイムテーブルで商売するのだから、当然のことながら最大のライバルは系列のキー局で、向こうは売り場面積が大きくこちらは小さい。しかも番組に関わる組織力や情報量に圧倒的な差がある。その中でキー局の営業マンに伍して戦うには、単なる営業を超えたオールラウンドプレイヤーであることが絶対的条件だと思つた。

われら世界に生きる

1970年(昭和45年)の春にデスク勤務から初めて外勤に出た。海外取材のドキュメンタリー『われら世界に生きる』(日曜午前10時半放送)が、その秋にスタートした。これが外勤としての初仕事だった。川崎重工1社提供の30分番組だが、本社が反対だった。支社営業・報道・編成で激論の末、本社を説得してもらってようやく実現した。

川崎重工東京広報部に最終プレゼンしたのが6月17日。30歳の誕生日だった。企画書は手製で、タイトルは印刷所近くのお寺の住職に毛筆で書いてもらい、浜松町の川崎重工に持ち込んだ。高層ビルの高速エレベーターが動くグツと荷重がかかり、その重みは、ちようど10年前の熱気とともに今でも忘れられない。

ネットチェンジ

支社時代の最大の「事件」はネットチェンジだった。その詳細は省くが、1975年(昭和50年)4月は営業外勤だった。NET(現テレビ朝日)系列の大阪局の東京営業なんて広告代理店などからすれ

ば軽い存在だったのが、TBS系列になつた途端に驚くほどマークされるようになった。電通の局担は支社営業部員の経歴資料を持っていた。TBSの外勤とスポンサーに同行したら、その翌朝に「何があるのか？」と代理店からチェックが入ったりした。TBSは圧倒的に強く、あらゆる面で放送業界をリードしていた。

仮面ライダー

『仮面ライダー』は現在もテレビ朝日系列で続いているが、最初に始めたのは毎日放送である。

1971年(昭和46年)4月から土曜夜7時半でスタートし、1975年(昭和50年)4月のネット



変身ブームを巻き起こした仮面ライダー
©石森プロ・東映

放送スタート後、しばらくは関東地区の視聴率が低く、その対策で実施された「仮面ライダーショー」で真夏の遊園地を走りまわっていた。『われら世界に生きる』と

チェンジ後、土曜の7時に移り、その年の12月に終了した。

この間の「昭和の仮面ライダー」は7作のシリーズで、第一号の主役は藤岡弘だった。

この番組の成立には支社営業が大きく関わった。漫画家・石森章太郎氏(当時)、講談社「少年マガジン」内田勝編集長、東映・平山亨プロデューサーの3氏からプレゼンを受けたが、最初はガイコツが主人公の「スカルマン」という企画だった。しかし、ガイコツでは営業は売れないと返したところ、バッタを擬人化した「仮面ライダー」が登場した。部の最若手としてこのなりゆきを経験し、正直いつて「そこまでやるか」と思った。

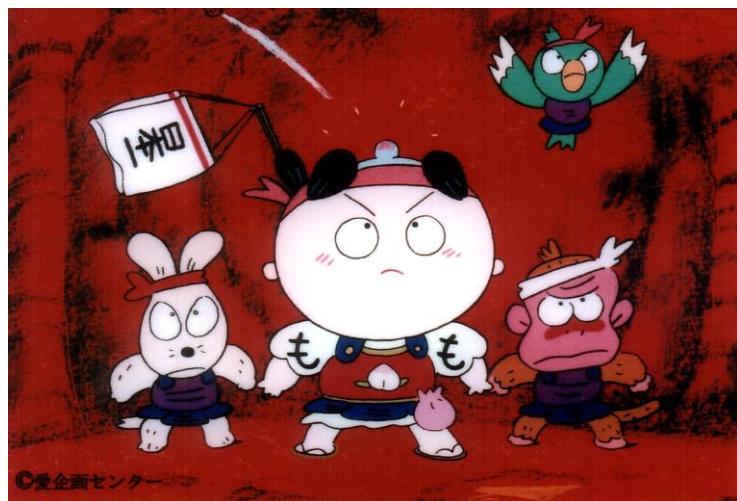
『仮面ライダー』に関わったのは30歳前後の頃でこの経験がこの後の営業活動の原点になっていたといえる。

さて、ここからは、私が企画の実現に深く関わった番組、イベントを幾つか振り返ってみる。

まんが日本昔ばなし

『まんが日本昔ばなし』はネットチェンジ騒動の産物でもあった。

その直前の1974年(昭和49年)12月末に、火曜19時の30分単独提供社が降りた。この時間枠は4月以降TBS発に決まっていたので、全く先に望みのない空白の3カ月だった。一方その頃、某社が「アニメ番組を3カ月、時間帯を問わず」と局を探していた。この話に飛びついた。なにせお金も企画もそろっている。しかも3カ月でよいのだから。ところが、番組がスタートするとあつという間に視聴率が20%超え、内容も教育的効果ありと大好評で



継続要請殺到、まんが日本昔ばなし ©愛企画センター

あつた。その後3カ月で終了とわかつて婦人団体を中心に継続要請が殺到した。なんとかせねばと四苦八苦の末、ネットチェンジ後9カ月のブランクを経て1976年(昭和51年)1月から土曜19時で『仮面ライダー』の終了を待つて再スタートした。市原悦子、常田富士男のナレーションの妙、グループ・タックというアニメーター集団のレベルの高さなどが成功をもたらしたが、最大のポイントは、原案の川内康範さんの「思い」だった

と言える。日本人が失いかけていく心の原風景を思い出し、次の世代に継承したいという熱意だ。番組スタート前から川内さんの事務所に出入りしていた。「怖いおじさん」といったイメージだったが、本社転勤後も「川内番」として、時々上京しては昼食をご一緒したりした。

世界まるごとHOWマッチ

『世界まるごとHOWマッチ』は、1983年(昭和58年)の4月に始まり、1990年(平成2年)3月に終了した。

当初、水曜22時の当社発枠を新企画に、と電通企画室のベテラン・プロデューサーに話すと、出てきたのがこの企画であった。同氏とプロダクションのイーストが抱えていた企画だ。司会に大橋巨泉を起用ということで決定した。

ところが、巨泉さんから大変な注文があった。「水曜22時では出演しない。別枠で」というのだ。



水曜はNG。世界まるごとHOWマッチ ©E&W/毎日放送/電通

理由は明確で、同時間に関西テレビでロート製菓が部分提供していたからだ。同社は、巨泉さんのメイン番組をTBSで全枠提供していた。その恩義に「弓を引けない」ということで、大変感心したのを覚えている。結局、木曜22時と入れ替えることになったのだが問題が多発した。提供スポンサー、扱い代理店との交渉の最中に、電通の内部で「電通が紹介した企画に他代理店扱いの電通スポンサー

があるのはいかなものか」と揉めだした。某社が企画変更に同意したが、扱い代理店を他社から電通にしたので、とぼつちりを受けて、私はその代理店から出入り差し止めを言い渡された。

ともかく木曜22時でスタートしたが、レーティングは最初から大爆発。「HOWマッチ？」が流行語にもなったりした。ところがしばらくして、系列の大改編のため、木曜20時への枠移動を要請された。移行に伴う番組宣伝で、東京の地下鉄に中吊りポスターを掲載したが、そのキャッチコピーが「8時の巢をつついたような騒ぎ」だった。番宣マンの意気込みを感じさせるコピーのおかげで移行後も絶好調は続いた。

巨泉さんはテレビの興隆期から全盛期を支えたひとりだが、リタイアを考え始めた時期だった。この番組は最後の全力投球だったと思う。それだけに番組にかける情熱は半端ではなかった。企画会議が思うように進まないと言葉をタタきつけて席を立つたりした。一方、ビートたけし、石坂浩二等々を伊東の別荘に呼んで企画に関するミーティングをやったり、

翌日は近くのコースでゴルフに引き込むなど、出演者の輪を広げていった。

ゴルフといえば、私が社長になつてすぐに相模原ゴルフクラブで制作関係の会を開催した際、巨泉さんも「あの雅やんだから」と参加してくれた。スタートから6番ホールまで、ほとんどワンパットパーでデッドヒートとなり、同伴の吉本興業・林社長から「あんた今日はホスト役やろ！」とあきれられたことを思い出す。

中村敦夫の地球発

『中村敦夫の地球発』はNTTが主要スポンサーだった。番組がスタートしたのは1985年のNTT誕生前、1984年(昭和59年)10月だった。つまり、電々公社→NTTのキャンペーンを意図する番組で、電通が持ち込んできたが内容がお粗末だった。どうやらTBSに持ち込んで断られたフシがあり、案の定、当社の編成も大反対だった。企画内容の変更を条件に話を続け、当初とは全く異なった内容になった。東京支社制作の信濃総合プロデューサーが中村敦夫を起用し、1回ごとの企画コンペ

形式を導入した。金大中の帰国道中取材や、グリコ森永事件など、かなり際立った取材が目立つ企画になったが、その後のあれこれは当誌143号で町田正夫先輩が悪戦苦闘ぶりを語っておられるので割愛する。

日曜30分枠

この他、日曜22時30分からの30分枠では、企画内容や提供社とのあれこれで記憶に残るものはいくつかあった。

『もうひとつの旅』音楽の旅はるか』は團伊玖磨さんがホスト役の音楽と旅の番組で1978年(昭和53年)から9年間続いた。前者が日立製作所提供で、後者の日本石油にバトンタッチの形が成立したが、日立の宣伝部長の残念そうな表情と日石の広報課長の感激の表情がいずれも忘れがたい。團さんとは葉山のご自宅にうかがったり、伊豆の八幡野沖で金目鯛釣りを楽しんだりとお付き合いが多かった。

『Ryus Bar 気ままにいい夜』は村上龍さんがホスト役の言いたい放題の番組で、日本たばこ産業(現JT)の単独提供だった。なか

なか視聴率がとれず企画変更やむなしと思ったが、営業とたばこ産業の若手連中に阻止され、3年続いた。

『今宵はKANUKURO』は5代目中村勘九郎(18代目中村勘三郎)がホスト役の番組。日本航空が単独提供で、彼を若手有望株として支援していた。

ゴルフトーナメント

1987年(昭和62年)2月にハワイのオアフ島で「ハワイアンレディースオープン」という米国LPGAの公式戦を立ち上げた。1973年(昭和48年)以来、日本で唯一のLPGAトーナメントを開催してきたが(現在はOTTOジャパンクラシック)その関係を利用して実現した。最終日を現地土曜にするとは日本では日曜になり放送には好都合。その知恵は若手でワイワイ議論の末、生まれた。オリポンサーだったが、オリエントリースからの社名変更キャンペーンの一環で、最大の話題は阪急ブレーブスの買収だった。当時LPGAにはティーグラウンドフェンスにスポンサー名を入れるという発想は全

く無く、その許諾と現地の大工さんに現物製作を頼むのに苦労した。

もう一つ、全く同じ1987年のしかも「レディースオープン」の2週間前に、ハワイのマウイ島で「大橋巨泉招待ゴルフ」を立ち上げた。「HOWマッチ」の出演を決めた時に巨泉さんから打診された、いわゆる「花相撲」だが、なにせ賑やかなトーナメントだった。男女プロ、アマチュアのスクラッチ戦、アンダーハンデ戦の4本立てで、アマチュアにはタレント・スポーツ選手が多数参加していた。提供社はアサヒビール。スパーードライ発売直後で同社の皆さんはものすごく活気にあふれていた。アマチュアの参加者は酒類問屋か大規模飲食店の経営者がほとんどだった。そのうちの1人がホールインワンを出し、これまた大騒ぎになった。

2つのトーナメントを立ち上げるために何度もハワイへ出張した。事情を知らない連中からは羨ましがられたが、とんでもない。オアフ島では開催コース探して1日に数コースを1〜2ホールだけプレーしたり、夜、レンタカーを運転して道順を間違え、西海岸を

半周して真夜中になったりと散々だったのだ。マウイ島ではトーナメントの運営を巡って巨泉さんを怒らせて大騒ぎになったことも。ひそかに水着を持つていったが、ついに一度も使うことはなかった。

スーパーリージョナル

ステーション

23年間の支社勤務を同じ部で終えて本社に転勤したが、ここからは一転して目まぐるしく動いた。本社テレビ営業部長1年、テレビ編成部長1年、テレビ編成局長2年、ラジオ局長4年(うち2年は取締役兼務)、常務(テレビ本部長)2年、専務1年の後、社長になつてしまった。

このうち、ラジオの4年間で極めて貴重な経験だった。

それまで全国ネットワークの世界で活動をしてきたが、ラジオは完全にローカルの世界だった。そしてテレビの圧倒的な成長によって片隅に寄せられているイメージがあった。

しかし、この認識は明らかに誤っていた。ラジオにこそ放送の原点があり、本質があると気がついた。ある時、若手アナが朝の生ワ

イド内で、当時問題になっていたTBSの「オウムビデオ事件」について擁護するような発言をし、リスナーからクレームが殺到した。大方は收拾したが、60代の女性がひとり収まらなかつたので、自宅に伺い、数時間話し込んだ。要するに彼女は問題の若手アナのファンで「あの子に一言注意してやりたかつたのに、局が組織の力で、それを阻むのは許せない」ということであつた。やつと納得してもらつたが、その後、彼女から番組等に関する手紙を頂いたりしていた。

このほか、夕方の生ワイドのキヤスターをめぐる、ラジオ報道全員と議論したり、テレビへの異動を拒否する制作部長と話し込んだりといった経験の末、後に社長就任時に掲げた「スーパーリ



MBSルネッサンスの起点、ちんぷいぷい

ーショナルステーションになろう」という経営理念にたどりつくことになる。「とびつきり地域に特化した局」の意で、放送局の存在意義は、いかに地域貢献できるかにあり、したがって放送は番組に引きこもってはならない、「脱ラジオ、脱テレビ」を目指さねばならないという宣言だ。



2004年に始まったイベント「オーサカキング」

常務テレビ本部長になって3カ月後に『ちんぷいぷい』がスタートする。着任後すぐに、営業、編成、制作の若手約10名から、この企画を突きつけられた。3時間、週5日のローカル生ワイドで、タイトルが示すように「癒やし」がテーマで角淳二アナの起用が必須条件だつた。後にたどり着く

経営理念の先駆けであり「MBSルネッサンスの起点」と位置付けた。

て社内50数カ所をキャラバンした。当初冷やかだつた社内の雰囲気が出した結論は「MBSは時代の熱源になる」という宣言だつた。その具体的な表現が2004年(平成16年)に始まったイベント「オーサカキング」だつた。7月の最後の土曜から8月の最初の日

オーサカキング

社長に就任した時は、会社全体に疲弊感が漂っていた。すぐに全社からメンバーを募つてブランディング・プロジェクトを立ち上げた。「会社がどういう体質で、どう外部から見られているか、これからどうすべきか」をテーマに、彼らは議論と調査を重ね、その結果を持つ



オーサカキングのマスコットキャラクター「らいよんキング」

曜日までの9日間、大阪城公園一帯で展開した。『ちちんぷいぷいで培った地域密着型発想満載の市民参加イベントで、社員全員参加を謳った。「水まき隊のおっちゃん」としてタンクを背負って城公園を歩きまわったことを思い出す。

このイベントは5年間で終わったが、社内にも社外にも残せたものが大いにあったと思う。そして、これこそが「スーパーリージョナルステーション」の実像の一端であったと言える。

この後、局の立場を離れて幾つかのイベントの成立に関わった。「大阪城サマーフェスティバル」は「キング」に関わった企業と組織が運営して、数年間実施された。「地方の時代」映像祭は1980年(昭和55年)から川崎、川越で開催されてきたが、2007年(平成19年)から大阪で実施中。実行委員会はNHK、民放連、在阪5局、関西大学、吹田市のチーム。

「平成(令和)OSAKA天の川伝説」は2009年(平成21年)から7月7日に天神祭のプレイベントとして八軒家浜で実施中。大阪天満宮、生國魂神社、京阪電車、フジオフード、毎日放送等で

「一般社団法人おしてるなにわ」を設立して運営、パナソニックのLEDの球を祈り星として数万個大川に流すイベント。「アーツサポート関西」は2014年(平成26年)に設立した、関西で活動する若手アーティストを支援する民間の組織。関西経済同友会 芸術・文化委員会を中心に大阪の文化予算の惨状を訴え、まず民間が動くことよって大きな文化活動の流れを生もうというもの。毎年若手のアーティスト支援の他に「そうだ、文楽に行こう!! ワンコインで文楽」「上方落語若手噺家グランプリ」も実施中。

「おわりに」
民放のスタートが1951年(昭和26年)。その興隆期に入社し、最盛期を経てデジタル化となり、「次」を模索する時期に卒業した。総じて「良き時代」を過ごせたと思う。成立からわずか70年でこれだけの変化をした「産業」は無いけれど、「放送」に拘って生きてきた身としては、やっぱり「スーパーリージョナル」に身を置き続けたい。

1964 (昭和39)年4月	毎日放送 入社
1968 (昭和43)年4月	テレビ営業部 配属
1989 (平成元年)年7月	東京支社 テレビ営業部
1991 (平成3)年7月	本社テレビ営業局次長 兼 テレビ営業部長
1992 (平成4)年7月	テレビ 編成局次長
1993 (平成5)年7月	兼 テレビ編成部長
1995 (平成7)年7月	テレビ 編成局長
1997 (平成9)年7月	ラジオ局長
1999 (平成11)年7月	取締役 ラジオ局長
2001 (平成13)年7月	常務テレビ本部長
2002 (平成14)年7月	専務
2007 (平成19)年7月	社長
2010 (平成22)年7月	会長
2019 (令和元)年7月	相談役
2022 (令和4)年7月	最高顧問 顧問

山本 雅弘 職歴

(やまもと・まさひろ)